

就職シーズンに思うこと

佐藤 文子

十一月一日、就職試験解禁ですがに四年生の姿はまばらである。まだ見通しのつかぬまま必死の面持ちで出かけた学生のことを思ったりする。十月末から十一月初めにかけては、公務員試験の最終結果もほぼわかり、研究室は明暗こもごも。私も人文社会科学部に移って三年目、最初は四年生に「就職試験にふりまわされないように」などといっていたが、九月から十一月にかけては、どうもおちつけない。今ここで現代の就職問題を論評する気はない。ただ就職シーズンに増幅してみられる学生の態度が日頃気になるのである。

まず第一は、希望先に就職はできない——就職試験におちたというだけで、自分をダメな人間として評価してしまふ。就職は人生の大事な方向決定であり、希

望通り就職できない人の落胆はわからなくはない。しかしどうもそれだけではなさそうである。偏差値、共通一次試験成績……と外の基準で自分を評価することになれてきた現代の学生は、自分のうちに自分を評価する基準をもたないように思われる。第二に、学生は就職雑誌や先輩たちから情報を得て、自分の希望就職先を決める。つまり先ず自分が就職先を選別し、序列づけするのであるが、彼らの意識においては、自分が序列づけられ、選別される側面だけが鮮明である。自分の選からもれた企業のことなど思ってもみない。

どうも学生は自分を「される」側におくのが好きらしい。私は今、臨床心理学実習を開講している。最初の時間に、絵本『はせがわくくんきらいや』を紹介し、その後「ぼく」がカウンセラーを訪ねる場面を想定し、ぼくとカウンセラーのロールプレーをした。カウンセラーはぼくにいろいろ質問したり、ヒソミルクについて説明して、ぼくに長谷川くんのことを理解させようと努力する。しかしぼくはカウンセラーの質問は

とんちんかんで、全然気持を理解してもらえたようには思えない。そこで役割を交替すると、今まで「ぼく」だったカウンセセラーは先のカウンセセラーと同じ質問や説教をくりかえす。そうしながら自分は、ぼくを理解しようとするという。

なぜカウンセセラー役になると相手の気持を理解するのが難かしくなるのだろうかを話し合っているうちに、ある学生が次のようなことを言った。「私はどうしてもカウンセセラーの立場に身をおくことができない。カウンセセラーだけではなく、親、教師についても同じだろう……結局私は被教育者、被支配者、被抑圧者、弱い者であり、教育者、支配者、抑圧者、強い者の世界はわからない……」

彼にとって世界は二つに分かれているようである。

強者の世界と弱者の世界に。私は彼に問うた。「今は子ども、学生、被教育者、被支配者、弱い者の立場に完全に身をおいているけど、卒業して教師、カウンセセラー、あるいは親になったらどうなるのか」と。する

と、「その時には良い親、良い先生、良いカウンセセラーになるようがんばります」という。自分の中に弱い者と共に存在する強い者、支配者、抑圧者に気づかず、異なる立場にある人の気持を共感できない人が頑ばったら、どんな親や教師になるのだろうかと私は不安に感じながら、この問題こそ私たちが学生と共に解決していかなければならない課題なのだろうと思った。

私は「させられ」意識が嫌いである。現代において、自分の行為が社会にどんな影響を与えるのかわかることは難かしく、影響される面のみが気づかれやすい。しかし幼稚園、小、中、高校、大学それぞれが、直接的人間関係において子ども、あるいは学生が相互の行為の意味を理解するような指導はできるであろう。人間関係の相互性を十分に自覚できれば、世界を単純に二分し、自分を専ら「される」側におくことはしないだろうと思うのである。

二月、受験シーズンの最中、子どもたちは自分の将来をどのよう方向づけるのだろうか。(岩手大学)